国立国会図書館　　タイトル『水の月』　請求記号 863-81

ガラス使用

863-81

題辞

嗚呼青史武門ヨリ生れて其才群を出風
に泉石膏肓に入り焼裏痼疾に成り
宦を辞して此才ヨリ足跡をさはめ方を
窶して志却俗諧にあらはうち終ハ此石の
木鐸となれり嗚呼青史業廣く流るう
してその名四方ヨリ馳セ其文縉紳ヨリ
達しまゝに寛政戊戌吾

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81

ガラス使用

相公召て紅葉社宴會を賜ひ終に俳諧中
興乃才器ある事を志そし給へし松永子か
先規に準して斯道宗匠の栄職を紹へり
嗚呼書史なんぞ拙和業をしてして徳乃
崇き上　三台の寵光を厚うし下四方社
鑽仰にあふや嗚呼書史天壽永のうへ司
命期を促し茲歳辛亥季夏庚申終に上仙
して子弟我をつ告　相府に冥しく

相公ろの下世を惜まきらはひ訃四方に達して
同盟永訣我かなし哉嗚呼書史ろ社業我ろく
其徳高うして門人已三千身我の業に通する
もの亦鮮しとせん嗚呼其業の廣く其徳乃
高ずや名弟玉屑其遺属をうきてろ社業を
はなり於是乎重て　台命を厚うして二世
宗匠の栄職をまはふおこしろの師ゝ終焉の記を
あらはし四方追悼社句章を揖めて此冊子我

なせり嗚呼事変れ業乱るく治亭さけ集も
徒に其一班を窺ふに足るかけ集もまた必ず治
業をあらはすこと歟嗣て句集文集出人多集文集
亦於ろ其くハ法くにしてあるべし其是を知もれハ
天乎嗚呼何ろ其盛那るも

寛政卒亥冬　友人　不木　譔

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

高汝貞武子

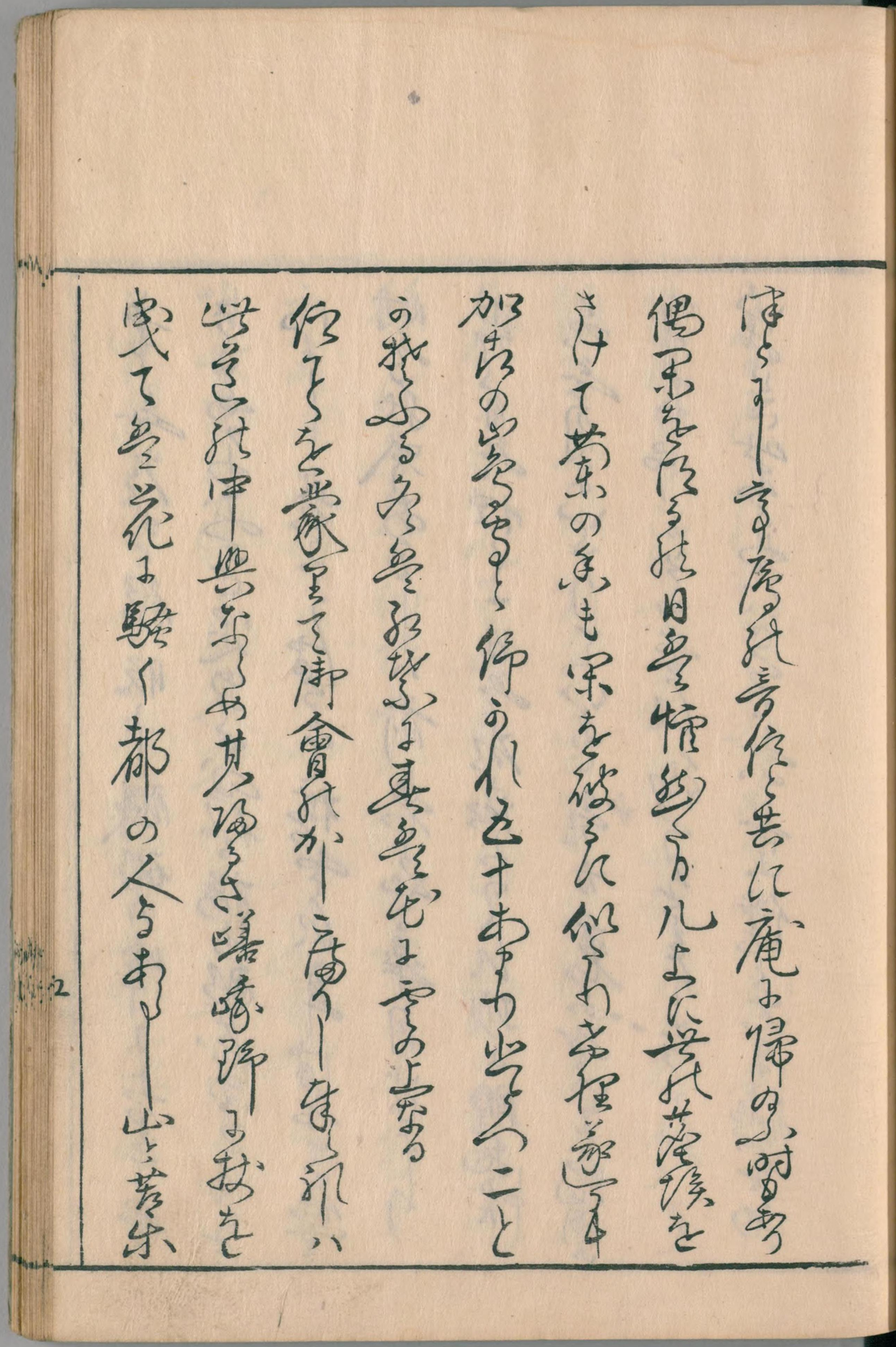
青蘿居士終焉記

亡は是も里にて國手柄山は此ふもと姫語の城主須井
侯の宮なりしの二宮袴の腰を退のしは年月仕
なる祖し石松の刺刀に髻を切拾山本坊今茶と
年稚處より風雅に志あり里に十三年の時東都の
去武坊の門に入生後此く我の人を得とし世に
能諧千變万化と云へとも故語さしを矢小寸
何のしは公務の風流を志ひ松舟小處の月君の

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

毛を存す心にかゝる限なく小海に遊びて無
南溟我臨ミ年の晦うをもよ何に夜秋を昏に
負ふて逍遙せしの一大事因縁あることを知
三千年うしを善澄禅寺東海和尚の法寵に文
心鏡を朗にし百人の竿頭に吟紙ありしと
此時まで雖と道理のふ四大色心の無常なる事を
発明して後の世を杉母ハるゝ時峰の松の吟あり樹下
石上に臥し糞雑丸を方に開とひ綴鉢に

餉をとらふの時月にもあらず祇と浮雲流水のごとく
此ゝ六を志ゝ手いつの本とこの請ひ志ゝふとの捨こに
也なり年来ゝて指を折にかゝるまなし捨の井に
明石の五齢麻兒の宗保桃水仙枝あるは大師の寫弁
林田の雨人野上ら綱手ハ手の者よりよ紀とする
麻兒の翼ゝ年業の元ゝ紫をわくの事 隠横
五人ものの里のいほりをむすひ此あるの時に絶て
三眺庵と号しも唯二夜三よの頭陀を体る



国立国会図書館　タイトル『水の月』 請求記号 863-81

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81

ガラス使用

濱松枕の丹とは双槌をなほしの梧庵五栗仙子
五双帰来なり桃水一の雄の両子は遥をむこのへ
看病に仏をゆこまあるは四来れ文音まで万るに
はきあるをあり予も加ふて半をとる高仙れ
庵舟員武蓮井の東圃牡蛎雪れ風虎脱頁
お府れ巴紋ぶ方るへ来す薪水の用を助く
姉路林田形波魚崎曽根明石の社中より居さう
かまて味ひとも却りひくに推乃へ高飛の

我の外遠をの門人慈友往来禮是かハし
聞はしかくて悩のふと歩み飲水の通ひも
こえく事いと今しけ之事を招きてこの挑なのう
書付無しとあるにあるよ

誰をこひの仏をまけ動き方ましあるまと此さひ
頭癰と入るやまひ大剣ほとにたれ方にせまり事
いのんともたりしのこかり事にし此大剣の用のうし
あらんやおあらは半我を用ることを志ふ毎に泉多く是
芙泉に帰る事にはくらんの

あるくらや夜ぬき持る水の月

とあるしを畫とめし是十一日の晩なれば貞武の
志のひて病床の像を寫し遣あり是は此二の
句を宋の醜き筆にかゝれ尺き乗じ世まりけれ
実にや能似たりとうち笑ひのひし是生涯の
ことひ終りなるをもしれ人々力を落たり　蜀國
弁鳩箕外白岐なと遠を業とし書きのとも
但す他の圍手をまきて十五日より法語の我　白
兵庫の山石菩章古姫語の花尾宗岳初坂の花樵

七

茶色福崎の五州三本の如鏡なと庵中に詰す
起居を助く各々神にかけて祈禱をなす本ゆ
とも多し中にも木水を人の吟　桃岐特集す
よしあけたり

涼風に雲吹れて水の月　木水

故に語ひとり川に友の船良

と云下に船あり是十六日の船なりは弟に報ゝ
出くなく終て十七日午前別もの里に念まして

八

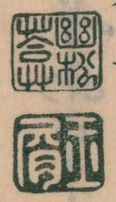
国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

鐘の消るのごとく息風絶西一座の稱嘆禿筆れ
及ぶ所にあらず 于時寛政三年辛亥六月十七日行年五十二歳而卒ス 死顔麗はし九
生るのごとく紀道髓をやりてわもひく座禪称名し
志をのぶる色の和風も宜く月を欲て影深宮に
流れ宮情惜を断 光明なる十九日の夜宮獨に
なれのうを瓶にかき入光念寺恵明上人を導として
光念寺れ侍に去ぬなんとし榕を和さむ志の事
廿一日葬送の式概りに無しと紙に風の便に

安ひして馳あつまる社中 式面にあらはり門葉の
法中あまる有と云ても此場に連ぬし是あのし此
長光寺湖月連光寺巣雨篠原善照寺藤 泊
魚崎常念寺彩如随應上人其の外諸宗れ僧
十余ヶ寺長木寺五齢和尚是亡体もらの姿の周ゝ
あれも予と共に此日はるとなり光念寺れ道場に
志て葬紙奠を出れ終法なく居士の本意に是
あらねしいとなりしは門人らの面目誠の高く

故人おのゆりしもあるへしや彼これの事と望
まゝのなかふとの五栗仙子なり同し志れ人々この
あまりある此情を試し書ちに筆をとり寄
愚子終焉其粗を記し雲前にさらけて廻向
をなし侍りぬ

於康兒川幽松菴牌下　玉屑觀應書



寛政三年辛亥六月廿二日於光念寺興行

追善之俳諧

根本式百韻

永たるや夜ぬき持る水の月　青蘿
大千世界きよ御涼風　玉屑
鵬の五尺の庵に持ちけらん　五齡
物ぐすあとなかく白ふ酒甕　布舟
小謡千鞍馬の花を金れて　蝸國

去蕃のゝほれ凍解れ人面　桃水
鹽砂に妻の日御のさしかり　寫竹
いけをくせ牛れ牛を出之　花樵
萬葉れ友まゝのぬ先に集りて　松溪
小弓の腕を出先に新雪　貞武
ウ
吹あれ多賀れ華表の名高く　可雄
丸れ檜波を津に重ねり　巴上
花人の勅使に下れ駕を舁き　宇竹

減れ腕をきれふ夕うせ　右契
松杉や千もとれ梅うち茂里　宗居
学なれて老をなくの車　如鏡
囲ハ花を世にあれ甲斐も嵯峨の夏　菩莪
髮六盤に起ふしの月　東圃
手両のかぎれ利をいる鉢の手て　巴紋
犢ちらをやむ露の刈草　木水
ひ松をうちよる舍人賢きに　帰木

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

神酒をたふ祝る新まきて　仙子
咲みちて宿も稲穂花の蔭　雨人
雪解に求食露は高脛　脱負
二十
明たなら浅芽の宿も長閑にて　風虎
鍵の鬢古をけめくるゝ人　藤泊
音菜を打よりしまる向ふ庭　洗洲
人拿はあらき伊勢の驛　素功
仮神の紛に娘を作られたり　玄駒

未進の高も迫里引年　起蝶
餅花によき無を行る床の上　芦仲
なこゝは小袖志の姫むらさ記　梅舎
海川は和を隔つあの津きに　化麦
葛籠負ひく山城の供　五艸
矢を清し茶を厭る松は皆　竹塢
杉し年　都婆は月光を入　花尾
吊じに踊をたゝらはた住の町　白岐

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

二ノウ

蒟蒻玉手かたまれ秋風　嵐外
公事持し御領の堺狩集を　湖月
一向寺を建れ地なりし　柴山
春ちの紀藏の樣を伐倒し　青岐
里も業の達毋霊雨降志く　巣雨
祈ふらんとあれは又呼淡し雪　魚寸
出とりう地獄を明夜あけ屋の　古瓢
生魚手馴よれ狐なふ里ほと　岩苔

度洗ひ帰れ白雨のあと　常和
椿樹手さしの雲月れ涼し九も　章台
枕のぬれ戸にうつる朱机　田旭
菓好の留ことも尺ゝ弾ハ煮へ　至峰
よりて捨をく奇れ七名字　梧堂
花曇大津一隅馬のあり事　梧庵
柳にも尺西児の黒髪　菰春
キ
長宋さに唐木れ佛戸を冥き　五川

かきの山なれば此羽の漁浦　執筆五栗

新晴は龍の色艶ことなくも　眉

鮑の貝はあまぬれもひや　齡

東語は旅に扶曳日を撰ます　舟

庭無杜丹は花の宮中　武

枳深くも高音に深れ新さは　溪

夢に望らん不破の関ゆ　國

墓出るを樋に志のひて送りけり　竹

追新筆ことを露此菅人　枕

ま川霄の夜無限なく月は照　契

沢出川雁の漸ことき年　鏡

駒を乗れ馬場は蓋駒師かして　圍

積重し蓋を拂ふ毛氈　虎

銀鉢に鮎の淀鯉盛なく人　上

二人は禿ひるに の光き　紋

月の輪芝寺無楊に名の三寸　水

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

雲あもりのまゝ　居
四方よりあされを添る雛る竈　舎
破しあらはを繼華郎　泊
永長の津れなくまの我ひ放し　子
緒岩手募れ冬の日あさ里　人
ちらくと言れ和梅匂ひ来す　寫
小倉の里のやゝ雪を侘しき　馮
人志れ雪に行きれ陳を通なれ　莪

月の名もなし昨日のはら　木
花と雲師武士のむかしなるやのに　屑
簾城に人ゆる垣のあさのほ　麦
ナナ
吾風呂手辭をさゝあしてうはさ　功
剛まて信濃の旅れ易さしよ　樵
朝の宮に兎子を産むひはく也　蝶
小舟手津くれに山梨　駒
引捨し車を誰の拾ふらん　艸

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

眠もあまりしぬ雲の花なり　桃
大寒を二十日嵐に尻を焚　貞
私雑炊の飡只ぬなり　渓
相東洲の夜乃あさかに啼鳥　竹
源氏の旗手旭輝き　双
花よ風の半川も梅ひの浪は上　木
縮る髪を剃刀持に分り　庵
名目の照なし半月夜のさ面　契

十ウ

田をもあるを少し花右に変る　雄
引篭る梅の塔の秋深く　眉
皆汲長江御三渕の雲居　洲
詩ぬりの素白と名のる友の事を　齢
斜にかゝる板の花ぐり橋　國
隠神の花のあと伸く花の霞　舟
春を手節に惜む百鳥　武

右五十二人滿座興行明石高砂
姫路加古川曾根志穗林田三木兵庫
但馬洪路之社中也

云師終焉を傷れ句初七日迄　各前書略

なきみのうれ蚊を追ふて只須の事　僧五齡
月すゝし九清くゆらんもとの言　大野寫竹
今無誰と何をゆふのほのやと休し　鹿兒川桃水
身子捨ハぬ帷子すゝし跡を送里　高砂布舟
少るのほれ己里なく送れ棺の形　林田雨人
月やれの行て我も鳴蚊の一ッ哉　明石蝸園
まゝのなきあ話やちゝ行方の事　高砂貞武

晨にもきえぬ命をたゞ手向の事　姫路花尾
夕のほかや枝なき夢の花ちのうな紀　日　木水
かハ里をてしひめたのかや夏の雲　日　宗居
すゝしさをアハるや記念の名は目　釼坂花樵
沾風はさゝめてたのなしや宣の夢　日　茶丘
西鄕や四海に照りて夜は月　福崎五艸
すゝしさやあたゝ神をうつ清の一粒伽の水　加古川仙子
秋ちかき松風のなしそのあ庵　日　五栗

夜神に伽うつ清神塚の露　日　可雄
松のかけの其一つ其ふや夜の涼　僧　藤泊
汗なくてほかりて塚の花と咲　加古川五刃
鮎魚は堂よりたのなきお神の事　日　魚寸
ひふをうらゝるしたかゝの晨の鄕　日　帰木
鎧なしうす伽　見たり塚の月　僧　巴上
　はのゝのされし扉を雲家に
　もらて旧神に志ほる
伽やあふきは鮎る年は花れ　新野辺風虎

月あの里荷なふの永を惠らせん　僧湖月
夜の夜や通ふなるゝ浮雲　明石化麦
經夜の夢とな拂のし跡を送り　日起蝶
なてしこれが涙の目日の本事　日葭江
たよりなや世を隔る夜の月　日子逸
鳴蟬の木の下のけや跡を送り　日春曙
月うつまき手向の田袋も夜の水　僧梟雨
かゝれてより脱てしや出し蟬のから　高砂李冠

同とかあまたけ汗に出るなり　日右契
こゝろなくも日をくらせ行秋を出し　日菁莪
寒蟬のなを出しきや葉の下　備後竹塢
夜蚊のかけや眠に立塚の露　別府巴紋
夢はたえなり我も鳴のの塚の蟬　日葭笛
法輪の月と化してや津ののる　僧流志
あ絶法ちは蚊も鳴深き此夕　曾根松渓
君ても善人なしや名此月　魚崎常和

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

いのちせきみ秋もなかの夜の夜の夜に　日　洗渕
池の蓮なし　ぬめや　水の月　日　素功
見る夜は伊豆唯名の月　日　彩州
跡道ゆゑやあつき洞に袖を作れ　赤穂白岐
月新のやとりもことし草の露　別府如柳
花の香の世にもなかれ蓮の香　口里有慶
明石の洞にぬるゝあふきこの雖　上田稚巾
夢のともに絵を夜をなるこの歌　日　磨雪

伊や半ち深ふ雲の峰高し　日　田旭
なきのくに秋をまつ川方の洞哉　日　梅明
あらもまは高秋沼念や夜の月　僧雪柱
白雨の洗ひもとらて我なるに　姫語去駒
なるの絶せむ皆も絵の月の入　釵坂壽石
伊や眠さ絶に夜の絵あるに　八重畑十和
香おもい遠きなるに夜跡哉　上都圭舟
西新やすしくうかふ水の月　日　白匣

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

かなぐぬけてあふくなりも此扇　上月馬肝
夜の月は夢をとつかは洞の事　藏壇鶯里
清みのりて古屋の墓に行洞　僧呼鶏
苔なる谷のうや清し蓮の花　新田亀石
目つきし此さうとき夜歸の船　富家嵩峰
志らせ其は清きを雲路の手向哉　市塢花来
帷なるはなるうや重地塚の前　日知水
月人拂ひ伴うかむ夜　此宮　日紫忘

たのうつる清みもか拂し晨哉　日紫言
心とは日く蟬も啼志むる塚の松　三木蓮窓
行なうて無身なのもやはの此前　日右香
伴や手にも取し拂ひ水は月　日芦仲
師の家拂しの和もふ秋もやうをし　日如鏡
撫ふは花にしみ也なうての船　淡路梧菴
なにきあらは晨きもう此夢語哉　僧玉屑

国立国会図書館　タイトル『水の月』 請求記号 863-81
ガラス使用

一七日追善俳諧

夕ゝ庭に現慰さ見へ　そのかの庵　玉屑

月にすゞしく皆待着れ　雨人

萬露の翅をたゞる糸毋に　布舟

あるかの蒸木風にたりなり　五齡

巫里に来れ　そ運に須圃す　宗居

出ると書屋に時　問ひに来る　五栗

ウ

雪ち神であるに美しき枕の宮　帰木

出る日女消れ　山の帯　魚寸

取くあらに生きたる夜の梅　梧菴

夢猫出るの逃てしまり　仙子

見屋神に一則を偏つ四目垣　巴上

恨るの事けを志の姫惟光　五夕

出結の袂を走ほる雪の月　東圃

下略

二七日追善俳諧

あきらめんて拝めんも涼し塚の月　五栗

移伽ゝ月照我ゝ方外の花　布舟

供ゝハつゝ左右の仮屋に引のきすゝ　玉屑

辭ゆく龍を皆老日もたゝり　桃水

本社ゝ井ゝ中に小雪社澤東の里　桃菴

明のゝ呼姫東の高木　仙子

ウ

美濃へ越る塩荷五六駄休居すゝ　藤伯

既に月踏と原出と同の采　巴上

姫る疾の眩に月むすのし　如鏡

神代此ことも御教温泉沢　可雄

恨ゝてもの心らぬうらみ帝に詠ゝ　五夕

左手の娘男に召さ祝し　帰木

下略

三七日追福之仏諧

五齡

[illegible]

玉屑

[illegible]

桃水

[illegible]

五栗

[illegible]

化麦

[illegible]

梅舎

[illegible]

湖月

[illegible]

起蝶

下略

悼之吟 三七日上[illegible]

[illegible]

林田李雨

[illegible]

明石梅舎

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

幻や夜師の薄あきれ月　曾根宇竹

夜語なき身に秋ふる秋の蝉　日　千潮

夕のほれ南き語と人は熟の南　作州　有礒

宮中語のかなりも思ひ日数の形　日　蛙聰

汗苦し何をちのかれ我恋哉　日　豫立

月と共ゆく人涼し雲の峰　繁昌　螢渓

夕のほやうき無れ夢を捜の嵐　日　一馬

人にうなうおもしあるおもを捜の秋　今市　愚寒

山本の岐の身内のりぬと備の岡山の
宮舎に告ふ事に驚きて

秋とさへ耳も忠しやかの柿　智川　青角

夕のせや西語とこほれ白蓮花　灘　千圭

西播に雲れもありてたせをかゆの事ふひつ
こアしにはふやこの訃に驚き笑の事なりきし
風雅の志ほ人をを歎きすし

さられ雲のたれみ南北樹の蛙の形　日　士川

夕すゝみ月のすしあつきんの南　浪花　尺艾

四七日追善之俳諧　七月十四日

文基年月をむかへ現は[illegible]　蝸國

手向れ数年[illegible]　玉屑

雲霧の宵に面里の嵐に[illegible]　五栗

七川過て[illegible]剛き熊野語　脱負

[illegible]　巴紋

賭[illegible]　仙子



ウ

[illegible]　花樵

小雨を行は[illegible]　帰木

[illegible]　梧菴

下略



国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

初月忌進善之俳諧　於暮樓亭

白雲絶や麻手に古屋の墓場堂　貞武

馬語を誦ふる松虫の吟　布舟

雲母ある柚の古家自つきし　古契

跡潮浴れ息子音信ありし　李冠

一むし語風に吹ぬ舟の皮　菁莪

あつの原綠鶴れふと人題　其流

ウ

樋さし人の音無せるしきお借屋　茄績

梓の娘意にかしこき　露文

其ゝ下れ絶て雲に伴神年月　舟

御手洗ふ事れ　飛ぶ蟇を　武

田へ通ふつくれのく桃裁ちし　冠

麻ぬるに先せる布の風雲　契

月白く梁浅れ松根の宿　流

鄕に落ちしおとく蟠蝠　莪

あやしくも八島は此石秋立て　文
笛の音かゝる並松の末　績
醉魚は鼻よし語きやあ屋を　舟
お産の鰔はなく菓葉　筆

下略

悼之唫　淡語社中

湖の令孫を吉まるに驚き
友とち折はとひこす

いさ共千消世れ舟ひやあ所は雲　大谷紫山
まあらしくふ俗のえて身は入ぬ　僧　萑空
秋風の何を便りによるれもとも　佐野物橋
堂人の稱て手向れ花よりすれ学　日　二春
おしの中ふに持るのけるも夜の月　日　杭頂
わの行りなるとる其果やあ藝の風　浦　梧秋

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

現柳や水をさらけて懺悔せ世　僧金毛
出るのほの三日も忘れぬ面向の那　柳沢言花
むらひぬふ清水手向人柳影　日飄尾
花に遊ぬ道已夜路の名殘哉　日櫻尾
石舟の碑にも立ちまきなれ　日我白
半よりなき風の葉の月の景　郡家青石
葉は我ふ今やうぼりて夜の月　日女春姿
咲人の夢無まことや　日舎苗



夜ゝ我ひきて汲々の那伽の水　日荊玉
うぼりかゝる無や志ゝ荘も手向草　桃川李村
無無自然とてもなき無の水の月　小山田青岐
夜渡の前ゝ語や笠ゝる忌れ因　日可郡
自動や持の仲をせ生れしへ　僧如泉
面影をきしや六月れ有しきに　僧龙水
鮑魚の積日無西に入ゝなり　吉田可耕
隠耕の記や無世峰の月　僧五陵

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

[illegible]

僧芦筌

松帆波洲

日其悠

日無曇

須本

八亀

五七日追善之俳諧

布舟

[illegible]

玉屑

脱負

可雄

梧菴

帰木

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81

ガラス使用

秘蔵出る寒の白梅ちらくと　五栗
西施を夢にたゞひ私語　仙子

下略

悼の吟　但馬社中

師のお姉何にそう無人　友の雲　大養釜峰
秋の月の清く甲斐なきや浜成　日　謂庸
闇を抑く名鶏といえん我　心　日　師牛

世を始めても涼しき夕立の蕃　日　春江
月落てまたあふうへの洞が蕃　日　季柏
粉まさふ鏡想の夢も水のうへ　廣谷乙坡
然しき無我が月の闇也　友の雲　日　馬北
風うけて扇に落ちて蕃の報　日　立畔
惜ても鏡のきこ友の月然し　日　南雲女
ちのうなや我より親もかけ清水　日　字樵
味をむ出姉指南に甘草のうへ　僧佛舟

西郭の雲居りもう津逢 簟 生野誇仙

春辺しき義ふ無いかゝる世人 茂蓮 土居如流

（法黄泉の客となりぬふよしを告来る日夏の旅たしこゝ雲前の宗）

影人を寄し越しきも秋の手向水 城崎長圃

弁に流ふ傳の本しき夕の月 生野涼秀

小海にあつまて此とを寄

宿の無やうきを百里社人の傳 京甫尺

追善之俳諧 但出石社中

前略

萩折すり根にむしろしくや月の雁 梧堂

折すし手向の宮隔り秋 一志

新百歳ふ姉を偲る袴是すす 梅午

五月 留里し川口の宿 竹魚

入遠ふ雪津黒田の先荷掬 月波

治拂る無を諷ふなり色凡 梅園

六七日追善之俳諧

貞武の画し　扇中の像を掛て
玉屑上人裏の小方なるに家年
記概を和書されいと詳細にあれ作し
是にむかひて法らく　[illegible]
[illegible]

[illegible]　桃水

[illegible]　秋の風

[illegible]　五栗

[illegible]　玉屑

刀を給ふ　[illegible]　吉日　可雄

ウ

[illegible]　梧菴

[illegible]　帰木

[illegible]　寫竹

[illegible]　魚寸

下略

[illegible]

秋風や[illegible]　[illegible]

悼の吟七、日迄

花も雪ふれ秋もして愛しかへら人　五庫里由
雖隠しあふ紀ゆ　かな風の歌　日　吉瓢
夜の嫂の骨にさゝる御洲の南　日　支鳩
身のうへ此秋となり今利此夕　日　岩苔
我ゆはふれも雖よ無いとゝの南　日　巴耕
まゝぬ月此もや立ちの秋の風　日　五風

現まほ里無まあるに備ふの　日　泉有
有明此新もたゝの此西新秋　日　其的
先ゝ大やおもひのけるに桐一葉　日　一好
夜ゝ紀思ひを殺風此西秋　日　章古
なけく皆ゝ七日ゆゝちたゝ夜此月　千本青鴿
志興屋の洞ゝむせふ夏の暑　日　亀鏡
夜此ゆめ又初洲のして洞の南　日　白魚
七色此御も七月此手向の那　日　文河

云淵の水の月とも、いふ所に、あるべきて再び被を志ぬる

涼しさはあつき間や　水の月　倶馬梧堂

文基の上座無し　秋の風　姫落蘇春

仲や簾こしに移る盆の月　日五川

水の月すゝしきとの記念の形　日寒彰

本とさきは時に　のうや西の雲　若刈陶河

湖島の町にもや半月廿日の夕と升裏之の吟詠消息に雲はるゝ移るきて

湖島に百里かゝり南き御くの南　日沂山

淵常に淸徳寓を明くれの眺とし年くの歳且ル是をよれ

稲妻になのき現ハ其に淸徳寓　高砂思問

むとゝんし無樹の雲徳のあきの風　日其流

のちのあきは被にむし　嶋秋の宗　日雲文

情むとも小ふのほ志ほむ且この南　石ア良交

幸なる如風の中よりやゝ鶴の秋　江州柏由

香花や四十九日も夢の雲徳　林田香蝶女

四十九日追善之俳諧

我袖に軍ゝしやせぬ場の露　脱貞
朝く清きあさの月に月　風虎
蟋蟀無弦の夢に帰り　玉屑
手桶に水を星の柴の戸　梧庵
疾忘神て腹に減しを帝に縁　五栗



西吹津の朝大寒の宮　蝸國
手鳴なき鴨の行き枝も声なり　巴汶
乞食の生を焚く松の宵　葭笛
ウ
元政の住ゐらやむ深さや　五齢
笛に記しき此津に多風　東圃
さしたる代に月の新清す　可雄
新酒に碑ぬきめき八を泣　化麦
蘭の香に雲井能庶を恨ゝ　梅舎



国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

絶妙鐘の峰に住居る　如鏡
大天狗膝もとくに馴よりて　花樵
あらしにあまる春の神雲　桃水
鉢の木は花待の姿に見様　寫竹
寂然明星は教のうち氏は　帰木
狩衣は裾に引越く雲の色　仙子

右一順下畧

百ヶ日追福之俳諧於　林裏舎興行

雨人

あらの中川香は幸ふりや雲の時雨
餘数に沙悪をのせて探る目　玉屑
冬ちの紀梢は鳴る切拝すし　野上
大塀に落く藪のあらあら　香蝶
美しき猫の森にある旭うけ　李雨
ちらしは小春風もなきく　花朗

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用

何となく松つる海や椎の角　丹笹山何止
清くしと禮を渡ひつゝあきの風　日　鯉合
獨見る月やまふたに物を人　日　左鎌
んあるや彼川岸人落一葉　日　如水
月とも木中に今日の市しきに
とある事のあるを思ひよせて
其中に人の多くなし月今宵　日　薛前
[illegible]
[illegible]
當稲て涼しきに[illegible]　浪花二柳

三十年をきいにし人加此重城の二枝庵に
鶴笠をぬきて
う神しさに森られぬ夜の川遥のなと
あまたる年の行今に秋里狂出しくて
森られ稲も夜の秋水きなしたの南　京都　蘭更
萩蓮のあとなるのしき夏の夏　丹波秀峰
名のゝ雪松の枯葉ふの白ひの南　江戸　袁丁
[illegible]時の須二十の月　日　宗讃
吹送る秋風無し[illegible]　日　吹石
山本の[illegible]なくなりしてゝ遠く
此[illegible]して再[illegible]の上を

富し人も生涯のさはりとなり人もさればこそ俳諧の誉をも雅文章の上にはまされりとぞいひけり

秋ちかし今はなき名の婦る反古　江戸 成美

かゝる夜の嵐拂ふて月や雲の峰　京 車蓋

雲一つなきかたや洞の庵　同 芦陰

ちる風も所ゑの庵雲の本　僧 蓼

夕の原秋の雲清浄なる梵音　京 其成

其流清水むかしをもて手向けり　同 把柳

風流を手遊し浮世の果さへ庵　同 不朽



旅のやとりは夕眺めに詠じ玉ふ芭蕉翁のあはれをしたひ、ある人の庵にて、秋の夜のしづかなるに、かれこれと語りあひて、心あるかぎりは、この道の友とて、夕の月をながめてよめる

名月の夜を指折る秋となりにけり　京 月居

此秋や旅に深し月の色　泉佐野 右稲

玉房法師の篇和浦雁を知らき見付るに
夜の人薄き今を祝ひ今のと申し時のもの
なりきさ浦の程に床しく

のちの夜のもの文ぬ今を薄のりし　湖南一萍
あと追ふて月まで附ぬ此日長成　僧如二
乾牛遠し月華月あとき日　丹波翠実
軍のうへ今年まで然し雲の蜂　日黛山
我袖も寒心の時雨に姫袖に今より　日魯縞

三十をりく此袖に拔をりも
此奥のあれてなり

雲の木の折まで志鶴も拝殿の　京紫暁

もつあり此人なしと夕かの　明石寮来
名のこ風に拔ふて草の花の庵　紀伊 僧強幻
すゝみ庵に夢の鮒魚尺ゝ鮒　城南下方
墨雲の花とかくいふ方に其の人　石戸亀渕
蓮の匂を浮世に告に夢の人　坂本于當
今無さて皆くあへさなのとなり　大津規風
あつき月を立志の人也其元基　薩摩宮元而
なの袖人に夜の枕志庵袖鐘の雲　京玄兎

寛政三年辛亥七月廿七日於玄来庵興行

追善之俳諧

敷もしらを吹くかしら嵐颯　重厚

人に帰るは夜ごとき　雲海　成美

久車の細枝のまゝ行　拝すり　袁丁

ひらはおもひ酒なく人童　宗讃

玄竊のおしをひらせる江の月枝　寸来

榛こゝ枝のこゝひし　泉三

まゝ雅祠宗六月中の七日　[illegible]

[illegible]

涼風も手ぬらかつはあるしの雅　京桃睡

人あれし唐橋にこゝの云　八世　日百池

[illegible]　日嵐月

道の[illegible]

[illegible]

[illegible]　日定雅

尾陽暮雨巻社中

松の息生朗 あらし西勝の志あり生も
橋慶なりたる事なれなれ後にあるのして須テの
手のうみ噂石にうしろなされ心よれ
無き度くなる人めくりて松のしき
横橋にのこしひ木母とし松ひかけに
ひ山の所の姫鳥に驚のされ其志し
たちかちくし市ちりも無ふ此
又到らんなり

我松かひ月無之所此海の際 枇杷園
うぼせしと書て里書ける洞の船 白圓
師に花あり里に此花に船の清水を 万岱

無ふと絵枝の夢 こうひ見えむ 羅城
花をも言川力も落て夜の露 乙周
嚶ふと鳴鳥なけれ身に汗江 卧央
川沙に暮尺るやう 駄六
尺もちらて名に無る神夫風雪 圃暁
芝と少れ宮に梅 桜無し 大阜
大里海に涼し 雪賢の迎春 帯梅
人なくてまき洞に夜の露 墨山



国立国会図書館　タイトル『水の月』 請求記号 863-81
ガラス使用

峰は今ぞ千ぶ人ぶ無れまゝの　聽吳
花は現世六月の佛の事　沂風
それの所語只ゆて詩有文の書　素兄
夕されや　ゆふの雲の露を神の毛　比如
水無月や　世に薪長の調む　素外
常心や　まを心は師雪道　李谷
苔うせて　松年有千仞　呉井
見る月の　算目を志や夜の蟀　南陽

水に影を紛ひし　寺花落ぬ　之楓
六月を鳴よ　其所有ときは　仙児
誰の事見　年身を形代の月来　辨二

ゆくし洞駄　御殿中の春無長花の
盛りあてゝ化諧なし　其神人の
台令烟景を以て　ゆふ熱し　意して
候ふる無　其所有ときは　有の情へし
其雜氏水無月十七日　身の雲
ぬし門牙玉屑布　永の有ゝより　告
おされ　中ゆふ暗ぬさの　肝清ぬ
しれ　花の御會に　吟誘を

まりし是場の百年社名参今
死にのつきすいさしの悔ましき　いま
ほしなるの道に紛擾の光るよりに
慶るを出てより周参の絶もなり
相我の意事無共に簾前にて
楊柳をうしひ御に臨して我いつるす
あり坊こゝにもたゝさに坊ゝる事あり
我いらつもこれさに今是生のの恨ゝ者
惜ゝても精名社をしく遥にゝ夕れ
やをゝ人やりてす

記此と根林天社にて拾

帰つまよ　暁臺

紅葉社御會花の御宴もいらゝ滞至
なく調ふまて月の折りと
天の御覚もてなかしに經歌の目と
共に西山にのゝれて餘天れなるのき
ゝに雅みをなれに

恭古

花を恨み紅葉をこの山川此秋や
なるのき記念社　被り照月　玉屑

高河に沖漕く帆無露人今す　不木

863
81

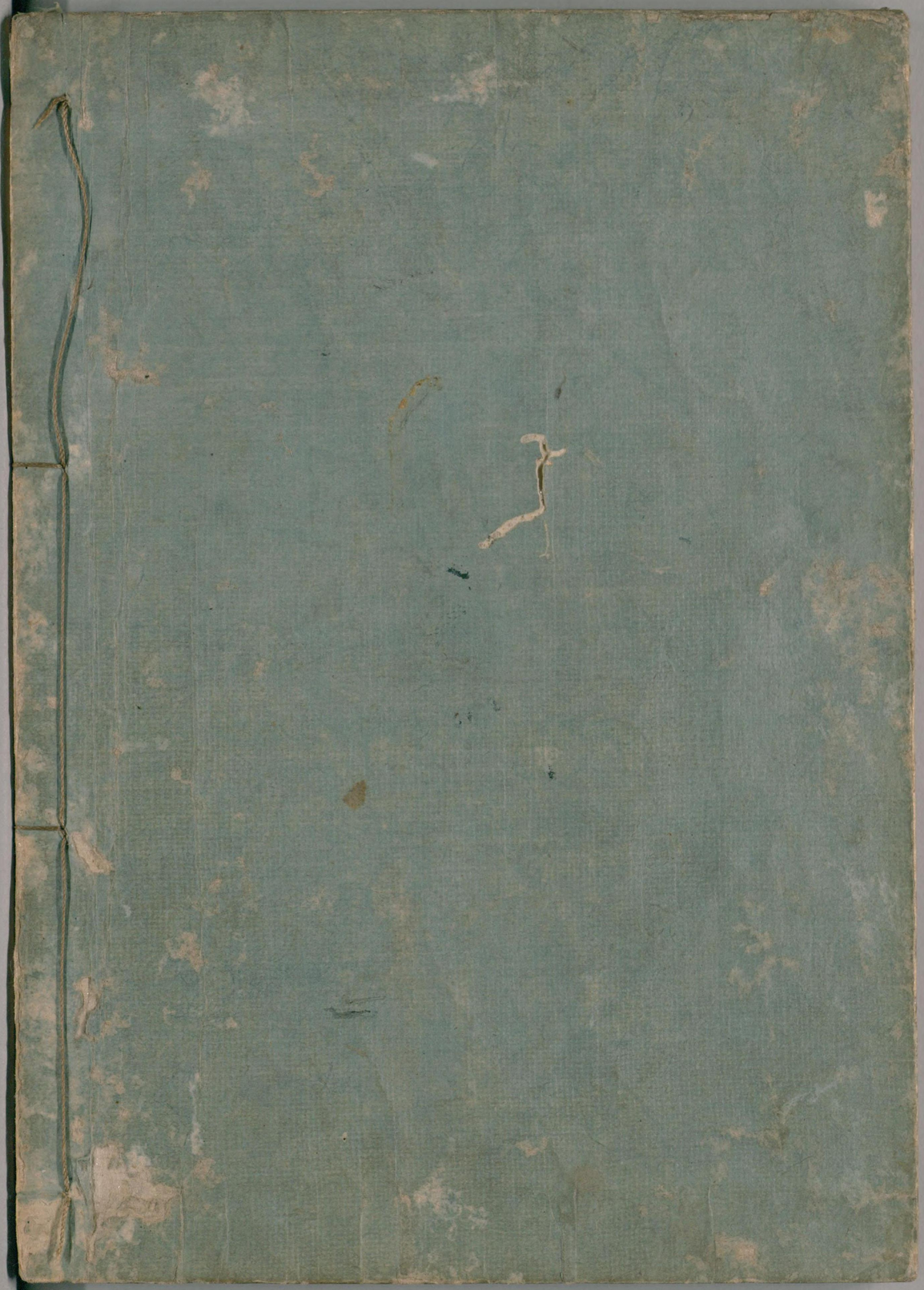
14138

水乃月跋

[illegible]

御俳諧書林　京三條通寺町西　菊舍太兵衛

国立国会図書館　タイトル『水の月』　請求記号 863-81
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『水の月』　請求記号 863-81

ガラス使用